
悪魔と私

モジカキヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と私

【Nコード】

N0626W

【作者名】

モジカキヤ

【あらすじ】

遅い夕飯を食っていたら、悪魔が卓袱台の向こうで私を見ていた。ふと思いついて一息に書いた掌編です。

カブと油揚げの味噌汁とアジの干物で遅い夕飯を食っていた。

ふと、目をやると、卓袱台の向こうで悪魔が慄然とこちらを見ていた。表情こそ無いが、全身から不機嫌さを漂わせている。

私が悪魔に気付いた事に、悪魔は気付いただろうが、それでも悪魔は一言も発さずに私を見つめていた。一方的に見られているものなんとなく癢だったので、私も悪魔の事を観察するように眺めてやった。

悪魔は美形である。目鼻立ちがすっきりとし、顔の造形は整い、目じりは鋭い。悪魔というのは人間を誘惑し、籠絡し、骨抜きにして、破滅へと誘う事を本分としているのが定説であるから油断はならぬ。たとい、どんなに美形であっても腹のうちに何を隠し持っているのか分かったものではないのだ。

しばらく見つめ合っていると、唐突に悪魔が口を開いた。

「……君」

「何だ」

私は努めて冷静に返事をした。

「本日、私は随分待ったよ。約束の時間よりも三十分早く着いたんだ。それで君が後で来ても、「今来たところさ」と言ってあげようと思っていたんだ。君は来なかったがね」

悪魔の口調は抑揚を欠いていたが、何処となく怒気を孕んでいる

ように感ぜられた。現に奴は怒っているに違いあるまい。

「とても悲しいよ」

と悪魔はさして悲しくもなさそうに言った。

「私と君とは随分な仲になれたと思っていたのに、それがこのザマだ」

確かに私は午後五時に悪魔と待ち合わせをしていた。急に入った仕事に追われて今の今まで完全に失念していたのである。

無論、私とて悪魔との約束を無下にするつもりなど無かった。しかし、どうしても外せない仕事の用事が入ってしまったのだ。

なんでもセミの発生が例年よりも数日早まったとかで、鯨の納品の期日が早まったのである。

私は動物工場で働いており、その時期その時期の不確定要素に左右される事は多々あった。それにセミの発生に対する鯨の重要性は、悪魔とて十分に承知している筈だった。

セミの発生に鯨が間に合わなくては光が食われる。光が食われればシマウマの数が少なくなり、象の部品が足りなくなる。象が作れなくなれば招き猫が地上にやって来るだろう。それは何としても避けなくてはいけない事なのだ。

しかし、私の弁明を聞いても悪魔は憚然としたままであった。

私はうんざりした。

「だって、お前だって分かるだろう？ 仕方が無かったんだよ。どうしても必要な仕事だったんだから」

私がそう言うと、悪魔はつまらなそうに「ふん」と言った。能面の様だった顔に少しずつ表情が浮かび上がってきた様な気がする。

「何日かぶりに会えると思ったら、それをすっぽかされる。連絡も無しに、だ」

悪魔は相変わらず抑揚のない声で言うが、不機嫌さは目に見えて増大している。

「素直に謝ってくれるかと思えば、「仕方が無い」か。私はね、君のそういう所には辟易させられるよ」

言葉が後ろへと綴られるにつれ、そこに含まれる怒気がひしひしと私に突き刺さった。

相手が怒っていると、自分も腹を立てる人間と、なんだか自分が悪いような気がして無暗に申し訳ない気分になる人間とがいるが、私は後者だった。

「悪かった悪かった、この埋め合わせはそのうちするよ」

「そんな事を言って、また逃げるつもりだろう。君は逃げを打つのは上手いからな」

そんな言い草は酷い、と思ったが、あながち間違ってもいないので上手く言い返せず、絞り出すように「逃げないよ」と言うのが関の山だった。しかし悪魔は攻撃の手を緩めない。

「本当かい？ 約束出来るかい？ 私の言う事を聞いてくれるのか？」

「ああ、約束するよ」

私はきつぱりと言った。こういう態度に出なければ相手は信用すまい。だが悪魔はさらなる攻撃の一手を打った。

「じゃあ、明日」

「は？」

「明日だよ。これだけ遅くなったんだ。明日は空けてくれ」

冗談じゃない、明日だって仕事が入っているのだ。

「いやいや、明日は無理だよ、大体な、お前言う事聞くと言っても少し我儘が……」とそこまで言っただけで私はギョツとした。相変わらず表情こそ無いが、悪魔の両目にじんわりと涙が浮かんでいたのである。

「……やっぱり逃げるんだな。君は酷い人だ」

いよいよ悪魔の頬を涙が伝った時、私は折れた。もう招き猫も鯨も関係なかった。

そういうわけで私は悪魔と出かける事と相成った。思えば、私はもうすでに悪魔に骨抜きにされていたのである。

(後書き)

感想などいただけと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0626w/>

悪魔と私

2011年10月8日11時48分発行